

絵本

◆おじいちゃん・おばあちゃん

『てんぐのそばまんじゅう』深山さくら／作，長谷川義史／絵，ひさかたチャイルド【E ミ】



⇒おじいさんとおばあさんが、怪我をした天狗のお世話をし、そのお礼に不思議なそばの実を授かるお話。こわがりで意地っ張りなおじいさんと、度胸のあるおばあさんのキャラクターが魅力です。山形県の神室連峰を舞台にしています。

『おじいちゃんのもうふ』ミュリエル・ブロック／文，ジョエル・ジョリヴェ／絵，ふしみみさを／訳，光村教育図書【E フ】

⇒ジョセフが生まれたとき、仕立て屋のおじいちゃんは、毛布をプレゼントしてくれました。その毛布は、ジョセフの成長に合わせて、ジャケットになり、ネクタイになり、ハンカチになり、ポタンになり…と、おじいちゃんの手によって生まれ変わっていきます。ユダヤに伝わる昔ばなしです。

『フリードリヒばあさん』ハインツ・ヤーニッシュ／文，ヘルガ・バンシュ／絵，関口裕昭／訳，光村教育図書【E ヤ】

⇒動物の足跡を追いかけて、三日三晩帰ってこなかったり、重たい家具も片手で持ち上げることができたり、なんでもやっつけてのける91歳のフリードリヒばあさんのお話。でも、そんなおばあさん、本当は…。

◆友だち

『エイモスさんがかぜをひくと』フィリップ・C.ステッド／文，エリン・E.ステッド／絵，青山南／訳，光村教育図書【E ス】

⇒動物園で働くエイモスさんにとって、そこにいる動物たちは友だちです。ソウとチェスをして、カメとかげっこをして、ペンギンの隣に座って、サイにハンカチを貸してあげて、ミミズクに本を読んでやる。それがエイモスさんの日課でした。ある日、エイモスさんが風邪をひいて動物園をお休みしてしまいました。すると、動物たちは…。2011年コルデコット賞受賞。

『おきゃく、おことわり?』ボニー・ベッカー／ぶん，ケイディ・マクドナルド・デントン／え，横山和江／やく，岩崎書店【E ハ】

⇒森のなかにお客嫌いなクマが住んでいました。玄関には、「お客、お断り」の張り紙もしています。ところが、ある日、クマが朝ごはんの支度をしていると、ネズミが1びき訪ねてきます。もちろん、クマは「お断り」してネズミを追い返しますが、そのネズミは、何度つまみ出しても家の中から現れます。

◆子どもの気持ち



『ちょうどいいよ』竹下文子／作，鈴木まもる／絵，佼成出版社【E タ】

⇒ゆいちゃんは、レストランでお子様イスはもう要らない。「だってもうおおきいもん」。でも、パレードは、お父さんに肩車してもらわないと見えない。「だってまだちいさいもん」。「ゆいちゃんって、本当は大きいのか？小さいの？」悩んだゆいちゃんが見付けた答えは…？

『どろんこのおともだち』バーバラ・マクリントック／作，福本友美子／訳，ほるぷ出版【E マ】

⇒どろんこ遊びや木登りが好きなやんちゃな女の子，シャーロット。そんなシャーロットに、ある日、きれいなドレスを着たお人形が届きます。そのお人形は、シャーロットと一緒に外で遊んでいるうちに、泥だらけになってしまいました。その晩、お人形をプレゼントしてくれたおばあさんが訪ねてきて…。

『おにいちゃんはアニマン』あきやまただし／作・絵，学研教育出版【E 7】

⇒えみちゃんのお兄ちゃんは，えみちゃんがピンチのときに，いろんな動物に変身して助けてくれる正義の味方「アニマン」なのです。幼稚園に遅刻しそうなときは，チーターに変身して幼稚園まで送り届けたり，「朝，起きられないかも」と言われれば，にわとりに変身して徹夜したり…。

◆あれっ？！

『じゃがいもポテトくん』長谷川義史／作・絵，小学館【E 8】

⇒北の国からやってきたじゃがいも一家は，そろって八百屋の店先に並びました。最初を買われていったのは，父さんの「じゃっく」です。そして母さんの「じゃじゃりん」，次に妹の「いもーぬ」が…。家族は離れ離れになってしまうのですが，ある場所で感動（！？）の再会を果たします。

『ワニあなほこほる』石井聖岳／作，イースト・プレス【E 9】

⇒ワニが一匹，スコップを持って何やら穴を掘り始めました。その横には，金魚の入った鉢が置いてあります。それを見た仲間のワニが集まってきて，穴ほこ掘りはどんどん大規模に…！

『だがしかし』内田麟太郎／文，西村繁男／絵，文溪堂【E 10】

⇒『がたごたごた』『おばけでんしゃ』などでおなじみのコンビの作品。駄菓子屋のダガさんは「だが」が口癖。鹿齒科医院のしかしさんは「しかし」が口癖です。この二人が一緒に旅に出るのですが，「だが」「しかし」と言い合ってばかりです。

『たちねぶたくん』中川ひろたか／文，村上康成／絵，角川学芸出版【E 11】

⇒ぶたが立ったり寝たりで「たちぶた ねぶた たちねぶた」…。ねぶた祭りと「ぶた」をかけています。「ごしょがわらさん」という瓦も出てきます。三大ねぶた祭りのひとつ「たちねぶた祭り」が，青森県五所川原市にはあります。

『いちにちぶんぼうぐ』ふくべあきひろ／さく，かわしまななえ／え，PHP 研究所【E 12】

⇒『いちにちおもちゃ』につづく「いちにち」シリーズの第2弾。男の子が，クリップ，メジャー，しおりなどの文房具に変身します。身をもって体験してみると，文房具の気持ちが痛いほど分かる！

『オオカミがやってきた！』うえだちえ／作，山口マオ／絵，童心社【E 13】

⇒日本児童文学者協会・童心社共催の第1回「絵本テキスト募集」の優秀賞を受賞し，絵本化された作品。ひつじの村にやってきたオオカミを撃退するため，ひつじたちが考えた作戦とは…！？

『ころんだのだあれ？』垣内磯子／作，田中清代／絵，鈴木出版【E 14】

⇒けんが，お風呂で10数える代わりに「だ，る，ま，さ，ん，が，こ，ろ，ん，だ」と唱えると，山のお寺では，だるまさんがころんと転がりました。転ぶのがだるまだけじゃつまらないと思ったので，今度は「うみぼうずがころんだ」と言ってみました。



『かまきりのカマーくんといなごのオヤツちゃん』田島征三／作，大日本図書【E ㉔】

⇒散歩に出かけたかまきりのカマーくんが、おいしそうないなごのオヤツちゃんに出会いました。カマーくんはオヤツちゃんを食べようしますが、そのときおなかがいっぱいだったので、明日のおやつに取っておくことにします。

『ピンクのれいぞうこ』ティム・イーガン／作・絵，まえざわあきえ／訳，ひさかたチャイルド【E ㉕】

⇒ネズミのドズワースは、ガラクタ置き場でピンクの冷蔵庫を見付けました。冷蔵庫の扉には紙切れが張っており、中には、絵の具とスケッチブックが入っています。それは、新しいことにチャレンジするきっかけを与えてくれる冷蔵庫でした。



◆鳥

『コウノトリのおはなし』マーガレット・ワイズ・ブラウン／さく，ティボル・ゲルゲイ／え，あんどりのりこ／やく，長崎出版【E ㉖】

⇒渡り鳥であるコウノトリは、春から秋にかけて、ハンガリーの農村で過ごし、秋になるとアフリカへ旅立っていきます。ハンガリーの美しい風景の中で、ひなを育てる様子や、そこに住む人々との関わりなど、コウノトリの1年が描かれています。1955年コルデコット賞銀賞受賞。

『ひよこのアーサーがきえた！』ナサニエル・ベンチリー／文，アーノルド・ローベル／絵，福本友美子／訳，文化学園文化出版局【E ㉗】

⇒めんどりかあさんの息子・アーサーが、突然いなくなりました。「毎年春になると、ひよこがごっそりいなくなる」と、あひるは言います。めんどりかあさんは、何でも知っているふくろうのラルフを訪ねて、アーサーを探してほしいと頼みました。



◆ライオン

『ライオンとねずみ』イソップ／[原作]，ジェリー・ピンクニー／作，さくまゆみこ／訳，光村教育図書【E ㉘】

⇒イソップ物語の「ライオンとねずみ」のお話。一度捕まえたねずみを逃がしてやったライオンは、その後、網にかかってしまったところをねずみに助けられます。文章はなく、動物の鳴き声と擬音のみが書かれています。2010年コルデコット賞金賞受賞。

『ライオンのすてきないえ』西村敏雄／[作]，学研教育出版【E ㉙】

⇒サルの大工さんは、ライオンに家を建てるよう頼まれました。サルが一休みしている間に、いろんな動物が次々にやって来て、勝手に作業を進めてしまいます。サルの大工さんが目覚めたときには、ライオンの家は完成していました！そこへライオンが帰ってきて…。

『うがいライオン』ねじめ正一／作，長谷川義史／絵，鈴木出版【E ㉚】

⇒動物園のライオンは、「百獣の王」の威厳を保とうと必死です。でも、ときには、ハメを外してお客さんを笑わせたくするときもあるのです。そこで、わざと転んでみたら、お客さんは大爆笑。ところが、足腰が弱いライオンだと思われるのは、ライオンのプライドが許しません。笑い続けるお客さんに、今度はライオンの威厳を見せ付けようと、カいっばいほえ続けていたら…。

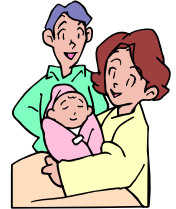
◆家族

『あかちゃんがやってくる』ジョン・バーニンガム／作，ヘレン・オクセンバリー／絵，谷川俊太郎／訳，イースト・プレス【E ハ】

⇒「いつくるの?」「なんてなまえにするの?」もうすぐお兄ちゃんになる男の子の不安と期待を描きます。ジョン・バーニンガムとヘレン・オクセンバリー夫妻の初めての共作絵本。

『たいせつなあなたへ』サンドラ・ポワロ=シェリフ／作，おーなり由子／訳，講談社【E ホ】

⇒一つの命が宿り，赤ちゃんが生まれてくるまでのお母さんの気持ちを，やさしい筆致で描きます。フランスの絵本。



『とうさん』内田麟太郎／文，つよしゆうこ／絵，ポプラ社【E ウ】

⇒母親が再婚して，新しい「とうさん」がやってきました。ぼくは「とうさん」のことを「おじさん」としか呼ぶことができません。ところが，ぼくが「おじさん」と呼ぶたびに，「とうさん」の体はどんどん緑色になっていくのです。

◆自由

『むこうがわのあのこ』ジャクリーン・ウッドソン／文，E.B.ルイス／絵，さくまゆみこ／訳，光村教育図書【E ウ】

⇒コルデコット賞銀賞を受賞した『かあさんをまつゆ』の作者の作品。黒人の女の子と白人の女の子の住む家の間には，大きな柵がありました。二人はお互いを気にかけているのですが，お母さんに，向こう側へ行ってはいけないと言われていました。

『ぬすみ聞き』グロリア・ウィーラン／文，マイク・ベニー／え，もりうちすみこ／訳，光村教育図書【E ホ】

⇒お屋敷に住む主人は，奴隷に肝心なことは何一つ教えてくれません。自分がいつどこへ売られ，家族と引き離されてしまうのか…。子どもたちはこっそり盗み聞きをし，それを大人たちに伝えました。



◆人生

『おおきな木』シェル・シルヴァスタイン／作，村上春樹／訳，あすなろ書房【E シ】

⇒『おおきな木』は昭和51年に本田錦一郎／訳で篠崎書林から出版されました。今回の新訳では，りんごの木の言葉使いが女性的になっています。読み比べてみてはいかがでしょうか。

『ゴッホ 風がはこんだ色彩』キアラ・ロッサーニ／文，オクタヴィア・モナコ／絵，結城昌子／監訳，西村書店【E ロ】

⇒フィンセント・ファン・ゴッホは，「ひまわり」などで有名な画家ですが，37歳という若さで自ら人生の幕を閉じました。フィンセントには仲のいいテオという弟がいて，二人はたくさん手紙のやりとりをしていました。この絵本は，残された手紙を基に描かれています。

『ひらめきの建築家ガウディ』レイチェル・ロドリゲス／文，ジュリー・パシュキス／絵，青山南／訳，光村教育図書【E ロ】

⇒ガウディは，蜂の巣の形をしたドアののぞき穴を造ったり，波のようにうねったお屋敷を造ったりと，大胆でユニークな建物をたくさん残しました。ガウディの独創性の秘密に迫ります。

『よめたよ、リトル先生』ダグラス・ウッド／作, ジム・パーク／絵, 品川裕香／訳, 岩崎書店【E ウ】

⇒ダグラス少年は、ADHD（注意欠陥他動性障害）で字が読めませんでした。けれども、リトル先生の粘り強い指導のおかげで、今では作家として活躍するまでになりました。自伝的な絵本。

◆原爆



『やくそくのどんぐり』大門高子／文, 松永禎郎／絵, 新日本出版社【E オ】

⇒広島で被爆した韓国人と日本人医師の友情を描いた絵本。韓国人の目線から、戦時中のこと、原爆のこと、その後の生活などが書かれています。韓国人の「わたし」は、広島で被爆し、戦後故郷に帰って大人になった頃に、原爆症を発症しました。その治療のため、久しぶりに広島を訪れた「わたし」は、平和公園でどんぐりを見つけて、故郷へ持ち帰り、畑にまいてみました。

『海をわたった折り鶴』石倉欣二／作, 小峰書店【E イ】

⇒「原爆の子の像」のモデルになった佐々木禎子さんのお話とニューヨークの9.11同時多発テロを結びつけた、実話に基づくお話。貞子さんの折り鶴は、ニューヨークにある9.11テロの資料館へ寄贈されたそうです。きっかけは、グランド・ゼロ（9.11の跡地）の鉄柵に供えられた折り鶴でした。

◆クリスマス

『ポインセチアはまほうの花』ジョアンヌ・オッペンハイム／文, ファビアン・ネグリン／絵, 宇野和美／訳, 光村教育図書【E オ】

⇒メキシコに伝わるクリスマスのお話。貧乏な家の女の子が、イエス様にお供えするものがなくて悩んでいると、教会の天使が語りかけてきます。「この緑の葉をつんで、もっていきなさい」。言われたとおりに、両手いっぱいの葉を持って祭壇に近付いていくと、女の子が持っていた緑の葉が、星の形をした真っ赤な花に変わっていました。それがポインセチアです。

『クリスマスのきせき』高島那生／作・絵, 岩崎書店【E ヌ】

⇒ペンギンたちが七面鳥へ、箱いっぱいに詰めた雪のプレゼントを届けます。ところが、届けに行く途中で、箱を落として雪はバラバラになってしまいます。プレゼントを待っている七面鳥のため、ここで諦めるわけにはいきません。ペンギンたちは、必死に雪をかき集めて…。

『クリスマスツリー』吉村和敏／写真・文, アリス館【C 3】

⇒世界のクリスマスツリーやクリスマスの様子を撮った写真絵本。日本のクリスマスとは、比べ物にならないくらい豪華なツリーやイルミネーションがたくさん。本物のもみの木を使ったツリーは、日本ではなかなか見ることができません。クリスマスにまつわる世界の文化も分かります。

『クリスマスツリーの12か月』エレン・ブライアン・オベッド／文, アン・ハンター／絵, 湯本香樹実／訳, 講談社【E オ】

⇒ツリーに使用されるもみの木は、クリスマスツリー農園で大切に育てられるのだそうです。農園でいろんな生き物と共存しながら、ツリーが育っていく様子が描かれています。

◆知識の絵本



『とりになったきょうりゅうのはなし』大島英太郎／さく, 福音館書店【C 4】

⇒近年発掘された、羽毛のある恐竜の化石にメラニン色素が残っていることが判明し、研究が進んでいます。恐竜は鳥になって生き残った!? 恐竜と鳥の謎に迫ります。

『ホネホネ絵本』スティーブ・ジェンキンス／作, 千葉茂樹／訳, あすなろ書房【C 4】

⇒『これがほんとの大きさ!』の作者の作品。大小様々な生物の骨を紹介します。ニシキヘビの骨格のページは必見! 体がいくつの骨でできているのか、数えてみます!?

『むしのかお』新開孝／写真・文, ポプラ社【C 4】

⇒小さい虫の顔を真正面から見ることで、なかなか難しいですよ。虫の顔をとらえた写真絵本なのですが、かなりのアップなので大人は引いてしまうことがあるかも!? 虫好きの子どもたちにどうぞ。

『糸に染まる季節』大西暢夫／写真・文, 岩崎書店【C 7】

⇒『おばあちゃんは木になった』で第8回日本絵本賞を受賞した作者の写真絵本。新潟県十日町市で染色の仕事を営む岩田重信さん一家の様子が描かれています。その土地とその季節にしか染められない色が生まれてくる様子を、じっくりと御覧ください。

◆絵の力



『まつり』いせひでこ／作, 講談社【E 1】

⇒『ルリユールおじさん』『大きな木のような人』に続く作品。栃木県鹿沼市の彫刻屋台まつりがモデルになっています。

『ジキル博士とハイド氏』ロバート・ルイス・スティーヴンソン／原作, リュック・ルフオール／再話, リュドヴィック・ドバーム／絵, 小峰書店【E 8】

⇒二重人格者を描いた作品を絵本化したもの。

『リヤ王と白鳥になった子どもたち』シーラ・マックギル＝キャラハン／文, ガナディ・スピリン／絵, もりおかみち／訳, 富山房インターナショナル【E 7】

⇒アイルランドに伝わる物語『リヤ王の子どもたち』から生まれた絵本。絵のガナディ・スピリンは、本書でニューヨークのソサエティ・オブ・イラストレーターズのゴールドメダルを受賞。

◆続編、シリーズなど

『ねぎぼうずのあさたろう その8』飯野和好／作, 福音館書店【E 1】

⇒シリーズ8作目は「にんにくにきちはしる!」です。

『怪僧タマネギ坊』川端誠／作, BL 出版【E カ】

⇒タマネギ坊が、海に巨大イカ、タコ、エビ退治に出かけることになりました。ブラックペッパーやターメリックなどのスパイスを調合した袋を携え、小舟に乗り込みます。「野菜忍列伝其の四」です。

『おでんさむらい ひやしおでんのまき』内田麟太郎／文, 西村繁男／絵, くもん出版【E ウ】

⇒「おでんさむらい」シリーズの第4弾。夏のうだるような暑さに、ひらた・おでんとかぶへいかけんかをしていると、橋の向こうから、燃えさかる火の車がやってきて…！

『ねむいねむいねずみとどろぼうたち』佐々木マキ／作, PHP 研究所【E サ】

⇒眠たくなったねずみが、古い小屋を見付けました。入ってみたけど、誰もいないようなので、安心して眠ろうとすると…。



『どうしちゃったの？ねずみくん』なかえよしを／作, 上野紀子／絵, ポプラ社【E ナ】

⇒元気がないねずみくんを見て仲間たちが励まそうとするのですが、ねずみくんはしょんぼりのままです。

『ルラルさんのたんじょうび』いとうひろし／作, ポプラ社【E イ】

⇒「ルラルさんのえほん」シリーズ第6弾。ルラルさんの誕生日、ケーキのにおいに誘われて、庭のみんながやってきました。生まれてきたことに感謝をしたくなる絵本です。

『ねこざかなのおしっこ』わたなべゆういち／作・絵, フレーベル館【E ワ】

⇒今回の仕掛けは、思わず触れたいくなるようなトビウオの胸びれです。

『へんしんマンザイ』あきやまただし／作・絵, 金の星社【E ア】

⇒「へんしん」シリーズ第10弾。まずは「かっぱきょうだい」の漫才から。言葉が変身するまで、何度も繰り返して読んでください！

『あくたれラルフのたんじょうび』ジャック・ガントス／さく, ニコール・ルーベル／え, こみやゆう／やく, PHP 研究所【E カ】

⇒今日は、悪たれねこラルフの誕生日です。ところが、ラルフはスリッパに歯磨き粉を流し込んだり、お店で大暴れしたり…。

『うさこちゃんと一なちゃん』ディック・ブルーナ／作, まつおかきょうこ／やく, 福音館書店【E フ】

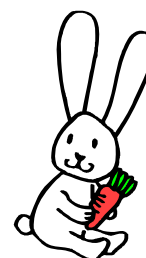
⇒うさこちゃんの文通相手の一なちゃんが、飛行機に乗ってうさこちゃんの家遊びに来ました。

『うさこちゃんのゆめ』ディック・ブルーナ／作, まつおかきょうこ／やく, 福音館書店【E フ】

⇒文字のない絵本。

『トリゴラスの逆襲』長谷川集平／[作], 文研出版【E ハ】

⇒『トリゴラス』は昭和53年に出版されました。そしてついに(?)「逆襲」です。



児童書

◆不安

『まつりちゃん』岩瀬成子／作，理論社【913 イ】

⇒夜遅くのコンビニや、公園に一人でぼつんという女の子「まつりちゃん」。家の中でも、電気もつけず、真っ暗な中でひっそりと過ごしている。どうして、こんな小さな子どもが一人でいるんだろう？お互いを思いやる家族の姿が、まつりちゃんの周囲の人たちに、忘れかけていた何かを思い出させてくれるお話です。

『わたしの世界一ひどいパパ』クリス・ドネール／作，アレックス・サンデル／画，堀内紅子／訳，福音館書店【953 ト】

⇒私のパパは、罪を犯して留置場に入っている。ママと一緒に面会に行った私を、なんと、パパは人質にとって、脱走したのだった。乱暴で無謀なパパだけれど、私は、「パパに最後まで付き合おう」と思っていた…。

登場人物を動物に見立てて描かれた挿絵も生き生きとしている。他に「弟からの手紙」「ぼくと先生と先生の息子」も掲載。

『ジャミーラの青いスカーフ』ルクサナ・カーン／作，もりうちすみこ／訳，さ・え・ら書房【933 カ】

⇒アフガニスタンでの実話を元にした作品。継母に疎んじられた少女ジャミーラは、父に町に連れて行かれ、置き去りにされる。孤児院に引き取られたジャミーラは、同じような境遇の少女たちと生活を共にする。亡くなった母がいつも言っていた「もし、自分が美しくないと思ったら、少なくともよい人間にならなくちゃいけないよ」という言葉を支えに、ジャミーラは勉強に精を出すのだった。中東図書賞受賞。



◆子どもの心の中

『小さな可能性』マルヨライン・ホフ／著，野坂悦子／訳，小学館【949 ホ】

⇒オランダの作品。小学生のキークのパパは、戦地で行方不明になってしまう。ママもおばあちゃんも不安な気持ちを持って余している中、キークは、子どもなりに考える。パパが死んだ子やペットが死んだ子はいるけど、その両方が死んだ子は余りいない。だから、パパが「死なない可能性」を大きくするためには、ペットが死ねばよいのだと、キークは、思い詰める。誰にも相談できない子どもの不安な気持ちを、ありのままに描いている。金の石筆賞。金のふくろう賞受賞。

『雲のはしご』梨屋アリエ／作，くまあやこ／絵，岩崎書店【913 ナ】

⇒小学5年生の優由と実月は、大の親友だった。ところが、家庭の事情で、塾に行けなくなった優由は、そのことを実月に打ち明けることができない。嫌いになったわけじゃないのに、今までどおり仲良くすることができない二人。友達関係の難しさや、少女から大人になるとまどいが、それぞれの立場から描かれている。

『11をさがして』パトリシア・ライリー・ギフ／作，岡本さゆり／訳，佐竹美保／絵，文研出版【933 キ】

⇒自分への誕生日プレゼントを探して、屋根裏部屋に忍び込んだサムは、小さい頃の自分の写真が載った新聞記事を見付ける。しかも、そこには「行方不明」の文字があった。自分は、一体何者なのか！悩み、苦しみ、真実を突き止めようとするサムと、それをサポートする風変わりな転校生のキャロライン。二人は、知らず知らずのうちに、お互いの持つ「こだわり」に、影響を与えていく。



◆明るく楽しいおはなし

『音楽室の日曜日』村上しいこ／作，田中六大／絵，講談社【913 ム】

⇒子どもたちのいない日曜日。音楽室にある楽器たちが、自分たちも合唱しようとする。ところが、ピアノを伴奏する人がいない。そこで、音楽室に貼ってある肖像画の音楽家たちに頼むが…。シリーズに『理科室の日曜日』もあり。

『おとなりさんは魔女』ジョン・エイキン／作，猪熊葉子／訳，岩波書店【933 エ 1】

⇒アーミテージ夫妻は、新婚旅行で、「週に一日だけは、おもしろい、びっくりするようなことがある」ようにと願ったために、毎週何かとんでもないことが起こるようになってしまった。「アーミテージ家のお話」シリーズ（全3巻）の1作目。

『ともだち』木坂涼／さく，佐藤彩／え，偕成社【913 キ】

⇒やさしいくまのおじいさんと，ねずみのぼうやのお話。ねずみのぼうやは，強がったり，知ったかぶりをしたりするけど，くまのおじいさんは，いつも優しく温かい目で見守ってくれるのだった。低学年向け読み物。



◆秘密

『クロティの秘密の日記』パトリシア・C. マキサック／作，宮木陽子／訳，門内幸恵／画，くもん出版【933 マ】

⇒黒人奴隷の少女クロティは，おぼっちゃまのお勉強中，うちわであおぐ仕事を命じられていた。当時は，奴隷が文字の読み書きをすることは禁じられていたが，クロティは，字を覚えることに夢になり，密かに勉強をするのだった。死ななければ自由になれなかった奴隷の生活とその理不尽さを，少女から大人になるクロティの立場から描いている。

『さとるくんの怪物』たからしげる／作，東逸子／絵，小峰書店【913 タ】

⇒公衆電話から自分の携帯電話にかけて，午前 11 時 11 分 11 秒に切ったら，魔物のさとる君がやってくるという都市伝説。小学 5 年生の航太は，怖さに耐え切れず，携帯電話を放り投げて壊してしまった。でも，それは，新たな恐怖の始まりだった。

『くじらの歌』ウーリー・オルレブ／作，母袋夏生／訳，下田昌勝／絵，岩波書店【929 オ】

⇒イスラエルのおじいちゃんの家に来た少年ミハエルは，くじらの歌の CD を聴くと，くじらになったおじいちゃんと一緒に泳ぐ夢を見たのだった。もしかして，おじいちゃんって，他の人とは違うの？



◆生き伸びる術

『ハンター』ジョイ・カウリー／作，大作道子／訳，マダ・ジュンコ／画，偕成社【933 カ】

⇒ニュージーランドの作品。不時着した小型飛行機に乗っていた少女ジョーダンは，弟のけがを治療し，食べるものを探さなくてはならなかった。呆然とするジョーダンの脳裏に浮かんだのは，知るはずのない洞窟の場所や，釣りの道具の作り方，薬草の種類だった。それは，100 年前の同じ場所にいたはずのマオリ族の奴隷少年ハンターが，必死で呼びかけてくれた魂の声だった。

『ふたりのプリンセス』シャノン・ヘイル／作，代田亜香子／訳，小学館【933 へ】

⇒冒頭からエンディングまで，試練の連続！サレン姫のため，命をかけて身代わりを務める侍女のダシュティ。彼女は元々，自然と共に生きる遊牧民で，歌を歌って，人の疲れを癒したり，本性をあらわにさせる力を持っていた。

『昔むかしの物語』イワナ・ブルリッチ＝マジェラニッチ／作，山本郁子／訳，富山房インターナショナル【989 7】

『昔々の昔から』イヴァーナ・ブルリッチ＝マジェラニッチ／著，栗原成郎／訳，ヴラディミル・キーリン／挿画，松籟社【989 7】

⇒クロアチアのアンデルセンと呼ばれるイワナ・ブルリッチ＝マジェラニッチの作った昔話を訳した2冊の本。小さく，弱く，貧しい者たちが，魔力を持った邪悪な者たちに，手を変え品を変え試される。妖精を描いた挿絵も独特の雰囲気があり，訳者による違いを読み比べるのも興味深い。



◆慈しみ

『青矢号：おもちゃの夜行列車』ジャンニ・ロダーリ／作，関口英子／訳，岩波書店【973 0】

⇒イタリアの作品。夜中に，町の中を行くおもちゃたち（電気機関車の青矢号，インディアン，子犬，飛行機，人形）…。彼らは，いつも，おもちゃ屋のショーウィンドーを見つめていた貧しいフランチェスコを不憫に思って，店を抜け出してきたのだった。

『ほこりまみれの兄弟』ローズマリー・サトクリフ／著，乾侑美子／訳，評論社【933 サ】

⇒ローズマリー・サトクリフの若い頃の作品。孤児の少年ヒューは，おばの家を出て，オックスフォードを目指す。途中出会った5人の旅芸人たちは，ヒューを快く受け入れて，仲間として危険からも守ってくれる。16世紀当時，「ほこりまみれの足」と呼ばれ蔑まれていた旅芸人たちの，本当は，気高く誇り高い様子が描かれている。

◆戦争と人間

『ヒトラー・ユーゲントの若者たち』S・C・パートレッティ／著，林田康一／訳，あすなろ書房【933 ハ】

⇒ヒトラーの活動を支えた多くの少年少女のインタビューと歴史的事実を，たたみかけるように構成した作品。若者たちの活動に異議を唱える者は，たとえ親や兄弟でも密告させたという。

『モーツァルトはおことわり』マイケル・モーハーゴ／作，マイケル・フォアマン／絵，さくまゆみこ／訳，岩崎書店【933 モ】

⇒モーツァルトだけは弾かない世界的なバイオリニストの話。少年の頃，街角で演奏する老人のバイオリンに夢中になった彼は，やがて，老人と自分の両親の数奇な運命を知ることになる。水彩画の美しい色合いと書かれている内容の恐ろしさが，胸に迫る作品。

